

げんだい遺跡 発掘調査報告書

1988

山形県
山形県教育委員会

げんだい遺跡 発掘調査報告書

昭和63年3月

山形県
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和62年度に実施した県営ほ場整備事業最上町西部地区にかかる、げんだい遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

最上町は四方を山々に囲まれた独立盆地であります。最上小国川に合流する中小河川沿いにはこれまで旧石器時代から歴史時代にわたる遺跡の所在が確認されています。本遺跡が確認されたことにより、最上白川沿いにも他遺跡の存在が推測されることとなりました。

発掘調査では多大な成果を上げることができました。遺構では多数の墓壙を検出したことが上げられます。遺物においても多量の縄紋土器が出土しました。

これら遺構遺物が土中より姿をあらわしては、我々に埋もれたる過去の生活の有り様を彷彿と再現させてくれます。しかしながら遺跡は一度壊してしまえば、二度と元には戻らないものです。今日に残る埋蔵文化財という文化遺産は、私達の祖先が長い歴史の中で創造し、育んできたものの痕跡です。これら祖先の歴史を知ると同時に愛護し、子孫へ伝達していくことが現在に生きている私達の重要な責務と言えるでしょう。

埋蔵文化財が地中に埋め込まれた、我々祖先の歴史である以上土地開発事業とのかかわりを避けて通ることは、現在難しい状況下にあります。近年県内各地で開発事業が増加するのに伴って、埋蔵文化財とのかかわりも増加する一方です。しかし、県民生活の文化向上、地域社会の整備などとの調整を求めながら、今後とも埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存です。本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねて、皆様の御理解の一助となれば幸と存じます。

終わりに、調査にあたって御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に、心から感謝申し上げます。

昭和63年3月

山形県教育委員会

教育長 小野 孝

例　　言

1. 本書は山形県教育委員会が、山形県農林水産部の委託を受け昭和62年度に実施した、
県営は場整備事業（最上町西部地区）にかかる、げんたい遺跡の緊急発掘調査の報告
書である。
2. 遺跡の所在地は、山形県最上郡最上町大字法田字道合である。山形県遺跡地図（昭和
53年）には951番として搭載されている。
3. 発掘調査は、昭和62年5月6日から同年6月17日までの延べ31日間行った。
4. 発掘調査の体制は下記のとおりである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐々木洋治・野尻 侃

現場主任 安部 実

調査員 月山 隆弘・渋谷 孝雄

事務局 事務局長 後藤 茂彌

事務局長補佐 土門 紹穂

事務局員 普原 徳嘉・佐藤 大治・長谷部恵子・氏家 修一

6. 本書の作成は安部 実と月山隆弘が担当した。編集は阿部明彦が、全体を佐々木洋治
が総括した。

7. 発掘調査にあたっては、新庄土地改良事務所、最上土地改良区、最上町教育委員会の
協力が得られた。ここに記して感謝申し上げます。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯	
1 これまでの調査経過.....	1
2 調査の方法と経過.....	1
第Ⅱ章 遺跡の概要	
1 遺跡の立地と環境.....	3
2 遺構と遺物の分布.....	3
第Ⅲ章 検出遺構	
1 層 序.....	5
2 A区の遺構.....	5
3 B区の遺構.....	5
4 C区の遺構.....	10
第Ⅳ章 出土遺物	
1 土 器.....	12
2 石 器.....	12
3 土偶・土製品・その他.....	21
第Ⅴ章 調査のまとめ	24

挿 図

第1図 げんだい遺跡と周辺の遺跡.....	2
第2図 遺跡概要図.....	4
第3図 A区遺構図.....	6
第4図 B区遺構図.....	6
第5図 C区遺構図(1) G 1~15.....	7
第6図 B区遺構図(2) G 16~23.....	7
第7図 B区埋設土器群.....	8
第8図 埋設土器断面図.....	8
第9図 土壙断面図.....	9
第10図 A・B・C区グリッド割り図.....	10
第11図 土器(1).....	13
第12図 土器(2).....	14
第13図 土器(3).....	15
第14図 土器(4).....	16
第15図 土器(5).....	17
第16図 土器(6).....	18
第17図 土器(7).....	19
第18図 土器(8).....	20
第19図 土器底部.....	21
第20図 土製品.....	22

図 版

卷頭 B区埋設土器群	
図版1 遺跡近景 他	
図版2 A区近景 他	
図版3 B区近景 他	
図版4 調査区近景 他	
図版5 A・B区埋設土器 他	
図版6 B区埋設土器 他	
図版7 土器	
図版8 土器	
図版9 土器	
図版10 土器	
図版11 土器・土製品	
図版12 土製品	
図版13 石器	
図版14 石器	
図版15 石器	

表

表1 埋設遺構観察表.....	11
表2 遺構観察表.....	12
表3 遺物観察表.....	23

卷頭図版



B区埋設土器群（南から）

第Ⅰ章 調査の経緯

1 調査に至るまでの経過

げんだい遺跡のある地域では、戦後個人により行われた基盤整備の際に縄文土器や石器が多数出土したという。現在は佐藤伝兵衛氏宅に保管されている。

遺跡としての正式な発見は昭和38年の『山形県遺跡地名表』による。その後昭和47年に『さあべい同人会』が最上町管内の遺跡分布調査を実施しており、「さあべい」第2巻1号（昭和48年）でその結果について紹介している。その後『山形県遺跡地図』（山形県教育委員会編、昭和53年）には、最上町管内で41箇所の遺跡が確認されており、げんだい遺跡は951番として記載されている。

昭和62年度に最上町西部地区の県営は場整備事業が具体化されるに伴い、県教育委員会では遺跡の保護と開発事業との調整を計る必要性が生じた。昭和61年秋には、遺跡が含まれる事業区内で、県教育委員会が遺跡の規模・内容を把握するため遺跡詳細分布調査を行った。試掘調査を行った結果、遺跡が段丘上にあったためか、以前の基盤整備により部分的に破壊されていることが解ったが、遺物包含層が良好に残っている地域を確認することができた。出土遺物は縄文時代中期から晩期にかけての土器・石器である。

この遺跡詳細分布調査の結果をもとに関係機関との協議を経た結果、県教育委員会が主体となり緊急発掘調査を実施する運びになった。調査の対象地区は昭和62年度事業実施地区内とし、昭和62年5月6日から同年6月17日まで発掘調査を実施した。

2 調査の概要

調査は初めに試掘トレンチ（5m×2m）を9箇所設け、遺構・遺物の遺存状況を再度確認した。この結果をもとに保存状況が良好と考えられる地域に、A・B・C区の3箇所の精査区を設けた。東からA・B・C区の順に、東西に約60m間隔で直線上に並ぶ形となつた。次に各精査区の表土を重機械を使用して排除した。地区割りは5m四方を1単位とするグリットとして、各地区ごとに1からの固有の名称を使用した。グリット番号は、北西隅より北東方向へA区でG1～G12、B区でG1～G15、C区でG1～G23である。精査区の面積はA区が300m²、B区が260m²、C区が375m²の合計で935m²となった。順次面整理を行い遺構の検出作業、遺構の掘り下げ、記録作業を行った。

6月9日には調査説明会を行い約140名の参加者を得た。



- | | | | |
|----------|-----------|---------|----------|
| 1 げんだい遺跡 | 2 孤穴口遺跡 | 3 高すず遺跡 | 4 水の手遺跡 |
| 5 鮎杉遺跡 | 6 森ノ越遺跡 | 7 宮の下遺跡 | 8 水木田遺跡 |
| 9 一本杉遺跡 | 10 山野神遺跡 | 11 材木遺跡 | 12 爰宕前遺跡 |
| 13 水上遺跡 | 14 お城山権遺跡 | 15 本城遺跡 | 16 熊の前遺跡 |

第1図 げんだい遺跡と周辺の遺跡 (S = 1 : 50,000)

第II章 遺跡の概観

I 遺跡の立地と環境

げんだい遺跡のある最上町は山形県の北東端、宮城県と秋田県に接する最上郡の東部に位置し、奥羽山脈神室山系にできたほぼ三角形の独立盆地である向町盆地を中心としている。標高1,000m以上の山々が峰を連ねて四隅をめぐっている。山麓には標高300m内外の裏山と呼ばれる台地が広く発達し、また翁峰に源を発する最上小国川は盆地中央を西流し、これに綱出川・最上白川・満沢川などの支流が注ぎ、広い沖積平原と河川に沿う氾濫源を作っている。気候は県北の寒冷多雨地帯に属し、夏場には太平洋側からの冷湿なヤマセが吹き込んでくる。年間積雪は110~120日にも及び、融雪時期が遅い地域である。

最上小国川に合流する中小河川沿いには、これまで旧石器時代から歴史時代にわたる41箇所の遺跡が確認されている。大半は繩文時代と歴史時代（城館跡）の遺跡で、弥生時代～古墳時代の遺跡の発見は今のところない。繩文時代の遺跡では、材木遺跡（晚期）、水上遺跡（前期～晚期）、熊の前遺跡（中期）、水木田遺跡（中期）、森ノ越遺跡（中期・後期）、宮の下遺跡（後期）が発掘調査されている。なかでも水木田遺跡では、土器が膨大な量で出土している。

げんだい遺跡は陸羽東線大堀駅を北東へ約1.5km行った、法田中地区東側の水田中にある。神室山を源流とする最上白川右岸の河岸段丘上に位置し、標高は216~219mを測る。遺跡の位置する最上白川右岸段丘の東西幅は約1.5kmほどある。現状は水田で、北側及び西側の標高が高くなっている階段状の地形となっている。基盤整備以前は微高地が連なる地形であり、付近には涌水地帯もあったようである。遺跡がある水田耕作土の下からは多くの河原石が検出されることから、過去に白川の河道となっていた時期があったことが伺える。

2 遺構と遺物の分布

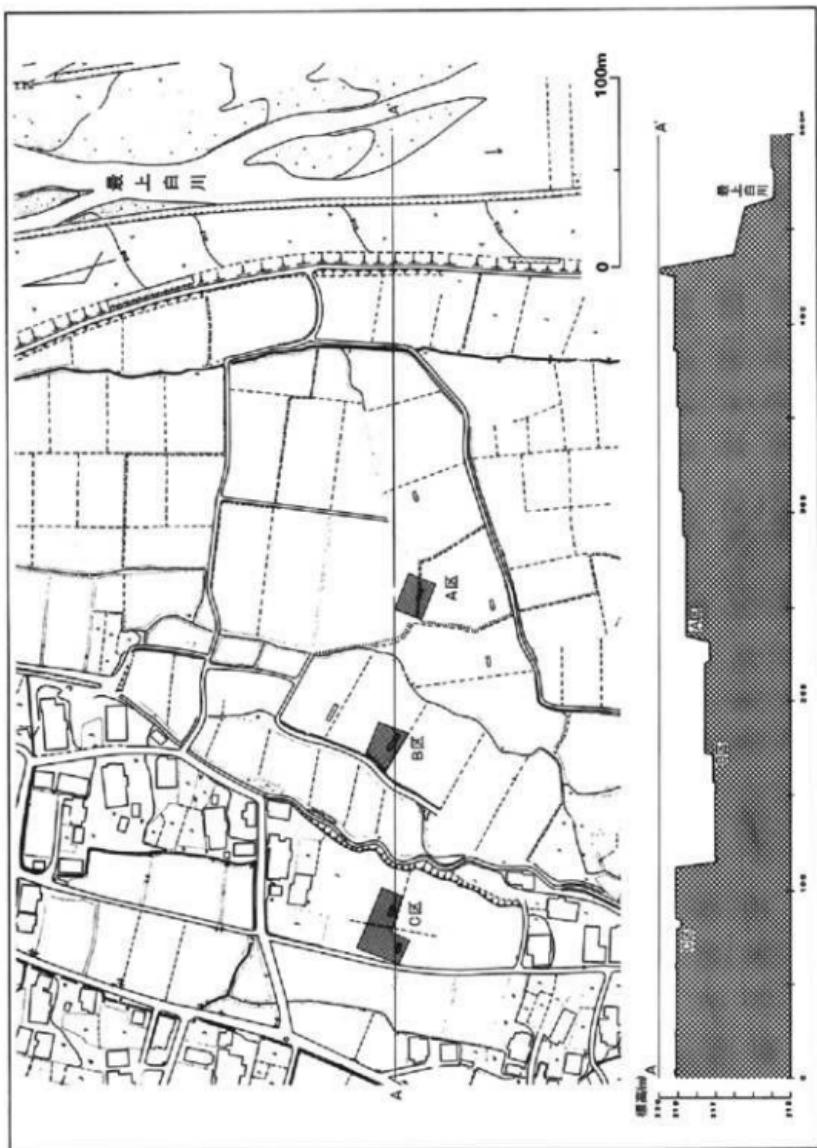
遺物包含層は基盤整備による削平を受けたため消失している地区がある。遺構の遺存状況が良好であるA区とC区は微高地にあり、B区はそれより一段低い面に位置する。

A区では北東側の遺物包含層は厚く遺物の出土は多いが、南西側は遺物包含層上部は削平を受けており出土遺物も少ない。

B区では埋設遺構群を検出しているが、表土のすぐ下が遺構検出面となっており、遺物包含層は確認されない。

C区では、表土のすぐ下が疊層となっている。遺物は北側（G1~15）に多く出土しているが、南側（G16~25）での出土量は極めて少ない。

第2図 遺跡概要図



第III章 検出遺構

I 層序

調査区域内は基盤整備による搅乱を受けているが、A～C区の基本層序はA区の層序を基本として捉えた。B・C区ではII層下面は疊層となっている。白川の旧河道で存ったことがうなづける。I層は茶褐色粘質土（耕作土）、II層は暗褐色粘質土（疊含む）、III層は灰褐色粘質土、IV層は黒色粗砂（遺物包含層）、V層は明褐色粗砂である。遺構はIII層上面で検出できるものもあった。

2 A区の遺構

埋設遺構4基、土壤1基、性格不明遺構1基が検出されている。埋設遺構はS X25遺構の南側に3基（E U42～43）がまとまって、南東に離れて1基（E U45）がある。

埋設遺構の土器はいずれも粗成の深鉢である。E U42・45の土器16・22は一個体で検出されている。E U43・44の土器6・11は共に体部上半が欠損している。土器の埋設方はいずれも正位の状態である。遺構の掘り方は埋設される土器にあわせて尖底状に掘られている。土器内部の土には骨片が混じっている。E U45の埋設土器(22)は底部が穿孔されている。口縁部・頸部に鋸歯状の刺突紋がある箇で、弥生時代前期の所産と考えられる。

S X25遺構はその南側の検出にとどまった。不整の矩形を呈し、規模は幅約5.5m、検出長約10m、深さ約30cm程である。底面は平坦で多数ピットが検出されている。住居跡の可能性がある。

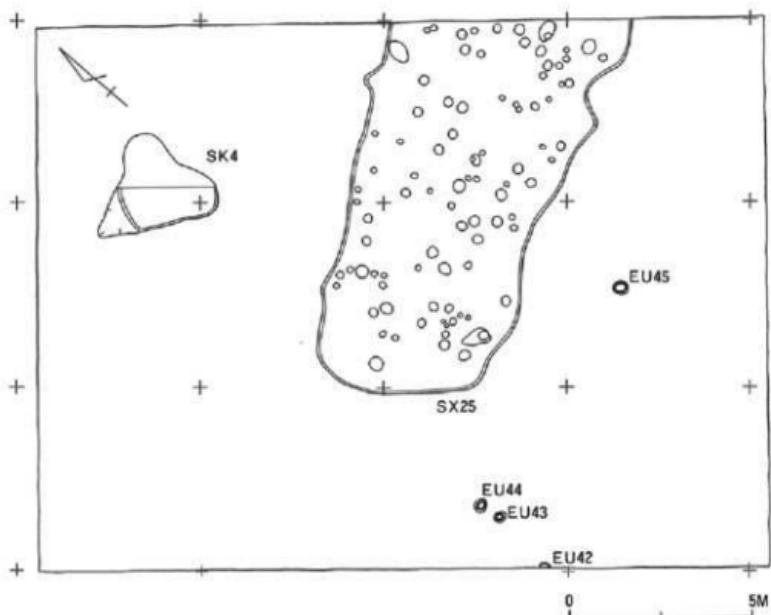
3 B区の遺構

旧河道にあたると考えられる地点で、A・C区より一段低くなっている。遺構検出面は疊（河原石）である。住居跡1棟、地床炉1基、埋設遺構16基、土壤5基が検出されている。

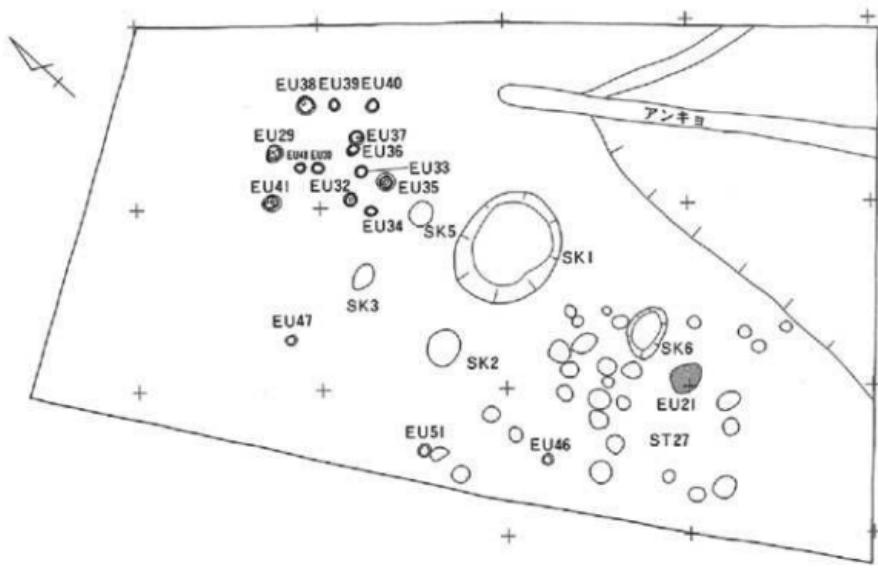
S K 1 土壤を挟んで北側に埋設遺構群が、南側に住居跡がある。

S T27住居跡はE L21地床炉と23箇所の柱穴が検出された。壁の掘込は確認できなかった。規模は柱穴間の距離から径5.5m程の円形を呈するものと考えられる。地床炉は住居の中心部にあり、径90cm程の範囲で焼土がある。柱穴は径50cm程のものである。

埋設遺構はS K 1の北側径4m程の範囲に13基がまとまっている。またS T27の西側に2基（E U46・51）と北東に離れて1基（E U47）がある。群集している埋設遺構は近接しているものに、E U48とE U30、E U36とE U37がある。四角に配置されたものにE U32・33・34・35がある。北東辺にはE U38・39・40が、北西にはE U29・41が直線上にある。埋設時における規範性があったことが窺われる。土器の出土状態は1個体のもの（E U38・

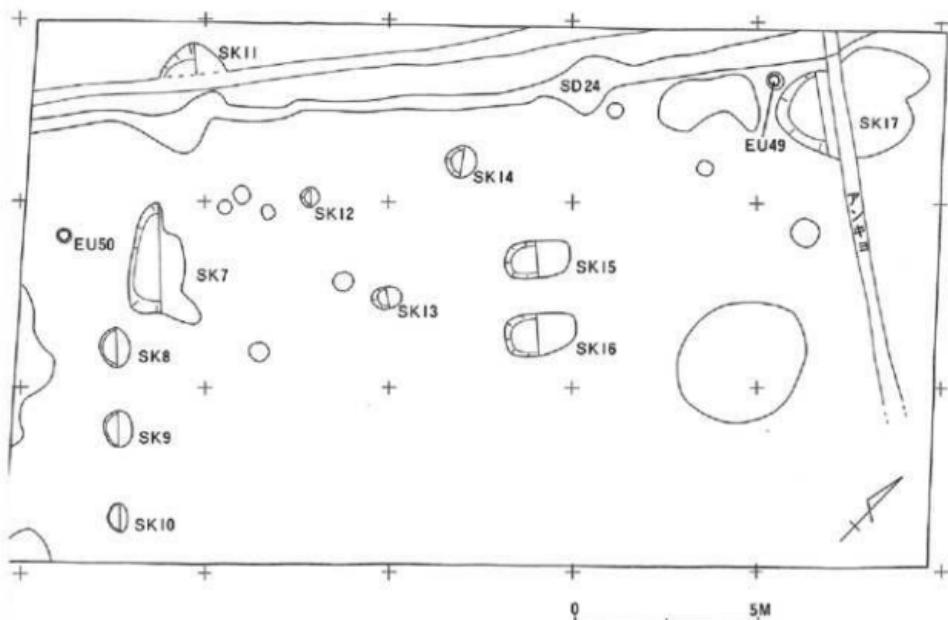


第3図 A区遺構図

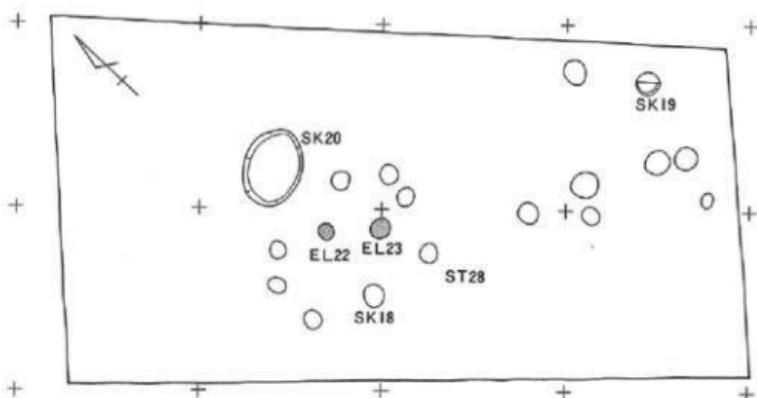


第4図 B区遺構図

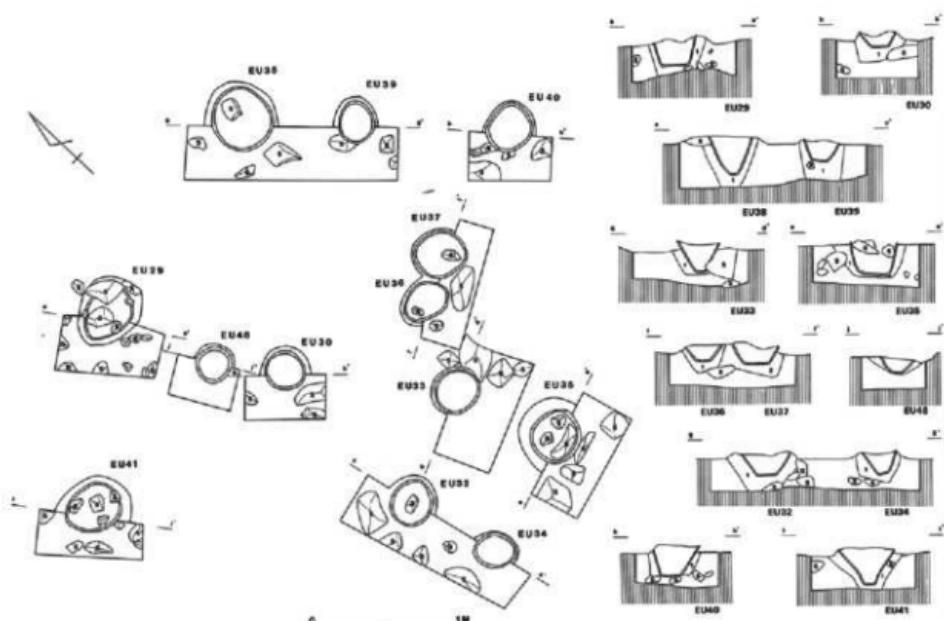
アンキヨ



第5図 C区遺構図(1) GI~15

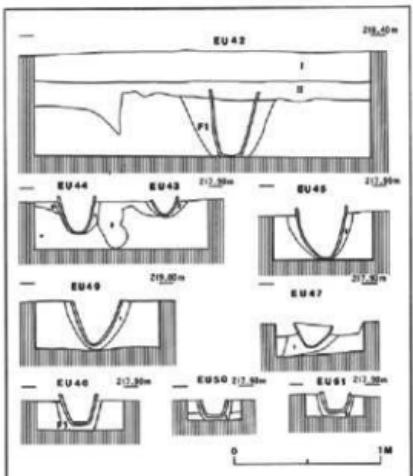


第6図 C区遺構図(2) G16~23



第7図 B区埋設土器群

土層
1. 黒褐色シルト 7.5YR 2/1 黄褐色粘土質シルト
2. 黒褐色シルト 7.5YR 7/8を若干まばらに含む。
セクションポイントの標高は全て217.90m。



第8図 埋設土器断面図

EU 42

F1. 黒褐色シルト 7.5YR 2/2
(明黄褐色粘土質シルト 10YR 6/6が若干まばらに含む)

EU 43-44

F1. 黒褐色シルト 7.5YR 3/1
F2. 黒褐色シルト 7.5YR 3/3
F3. 黒褐色シルト 7.5YR 3/2
(F1・F2・F3に明黄褐色粘土質シルト 10YR 6/6が若干まばらに含む)

EU 45

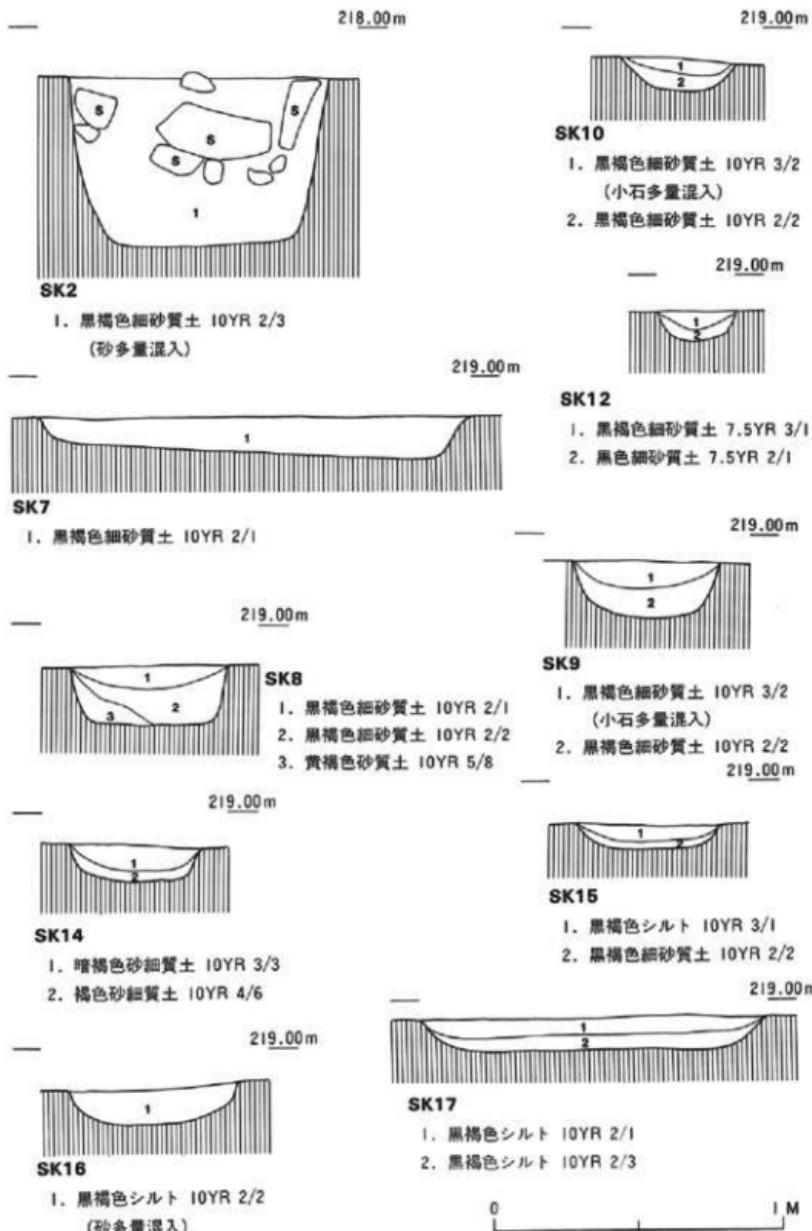
F1. 暗褐色シルト 7.5YR 3/4
(明黄褐色粘土質シルト 10YR 6/8)

EU 46-47-51

F1. 黒褐色シルト 7.5YR 2/1
(黄褐色粘土質シルト 7.5YR 7/8が若干まばらに含む)
I層. 黄褐色粘土質シルト 7.5YR 7/8

EU 49-50

F1. 黒褐色シルト 7.5YR 2/1
(黄褐色粘土質シルト 7.5YR 7/8が若干まばらに含む)



第9図 土壌断面図

29・36・41)と、体部上半が欠損しているものがある。一個体で検出されたものは、体部上半が内部に陥落した状態であった。埋設遺構の土器はいずれも粗成の深鉢である。内部の土には骨片が混じっている。土器の埋設方はいずれも正位の状態である。遺構の掘り方は埋設される土器にあわせて尖底状に掘られている。土器の底部が穿孔されているものにはEU39(土器3) EU29(1) EU48(10) EU32(7)がある。焼成後の打欠きによるものである。

4 C区の遺構

遺構確認面が疊層なので検出には難儀した地区である。住居跡1棟、地床炉2基、埋設遺構2基、土壤14基、溝跡2条、ピットが検出されている。遺構の密集度は散漫である。

S T28住居跡では2基の地床炉(E L22・23)と、7ヶ所の柱穴が検出された。壁の掘込は確認できなかった。規模は柱穴間の距離から径5m程の円形を呈するものと考えられる。地床炉は径60cm程の範囲で焼土がある。柱穴は径50cm程のものである。

E U49・50埋設遺構には各々に土器が埋設されていた。土器の保存状況が悪く破片での出土状態である。器種は深鉢で、内部の土には骨片が混じっている。EU50は出土土器からみるに縄紋時代中期末大木10式期の所産と考えられる。

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12

A区

1	2	3	16	17	18	19
4	5	6	20	21	22	23
7	8	9				
10	11	12				
13	14	15				

C区

2	3	4	5
6	7	8	9 10
11	12	13	14 15

B区

第10図 A・B・C区グリッド割り図

表1 埋設遺構観察表

遺構番号	検出 地区	計測値(cm)			土器 番号	R P No.	備 考
		長径	短径	深さ			
EU 42	A 11	129		77	16	15	
EU 43	A 11	30	32	23	11	17	
EU 44	A 11	34	32	45	6	18	
EU 45	A 8	48	46	63	22	20	
EU 29	B 2	50	41	44	1	2	土器内部上面に埋
EU 30	B 13	35	32	44	13	3	
EU 31	B 2					4	
EU 32	B 3	37	34	48	7	5	土器内部上面に埋
EU 33	B 3	35	33	35	18	6	
EU 34	B 8	31	30	36	12	7	
EU 35	B 3	51	48	45	4	8	土器内部上面に埋
EU 36	B 3	40	35	37	15	9	EU37に埋られる
EU 37	B 3	34	30	35	2	10	新EU37・旧EU36
EU 38	B 2	51	50	67	5	11	
EU 39	B 2	34	30	48	3	12	
EU 40	B 3	37	34	43	19	13	
EU 41	B 2	52	45	51	14	14	
EU 46	B 14	35	32	39	8	93	
EU 47	B 7	35	32	32		98	
EU 48	B 2	57	54	21	10	99	
EU 51	B 13	42	36	31		107	
EU 49	C 1	50	48	30		100	土器内部下端に埋
EU 50	C 14	44	42	27		103	
EU 52	C 14		32	26		111	

表2 遺構観察表

遺構番号	検出 地区	計測値(cm)			備 考
		長径	短径	深さ	
S X 25	A			550	30
E L 21	B	90	70		S T 27内
E L 22	C	46	40		S T 28内
E L 23	C	58	50		S T 28内
S K 4	A	346	260	48	
S K 1	B	320	265	20	標準量混入
S K 2	B	102	90	119	標準量混入
S K 3	B	78	56	23	
S K 5	B	70	60		標準量混入
S K 6	B	142	96	35	
S K 7	B	340	150	26	標準量混入
S K 8	B	106	89	43	
S K 9	B	100	90	39	
S K 10	C	75	55	21	
S K 11	C	90	82	38	
S K 12	C	58	55	21	
S K 13	C	72	58	26	
S K 14	C	90		20	
S K 15	C	178	98	18	
S K 16	C	200	112	20	標準混入
S K 17	C	428	270	21	
S K 18	C	66	54	24	
S K 19	C	62	60	26	
S K 20	C	220	160	41	

第IV章 出土遺物

1 土 器

土器は整理箱にして126箱ある。遺構内出土のものより、包含層出土の割合が多い。一個体に成りうるものは少なく、ほとんどが破片である。土器の時期は繩紋時代中期末・後期後葉・晩期、弥生時代のものである。量的には晩期のものが多く、中期のものは微量である。

埋設遺構に使われた土器はすべて粗製の深鉢である。基盤整備による掘削のため上部が欠損しているものが多い。大きさは口径30cm、器高40cm内外のものである。底部が穿孔されたものが5点ある（1・3・7・10・22）。22は弥生土器の甌である。頸部が屈曲し肩が張る。口縁部にヨコナデが見られ、口唇部と頸部に横位のクサビ状の刺突紋がある。

21・27～29は繩紋時代中期末大木10式期のもので、幅広く大振りな隆帯紋が口縁部から胴部上半にかけて巡っている。

72・73は弥生土器の蓋と考えられる。2点とも外面に赤色顔料が塗付されている。口縁部が一部破損しているが、向かい合わせで対になる穴が焼成前に開けられている。

土器の底部には木葉痕・繊物状圧痕がみられる。木葉痕は広葉樹と、平行葉脈を呈する笹葉状の葉を使用したものがある。

2 石 器

出土した石器には石簇・石錐・笠状石器・石匙・磨製石斧・石刀・石棒・岩版・磨石・凹石がある。特定遺構からの出土例は少なく、ほとんどが包含層出土のものである。

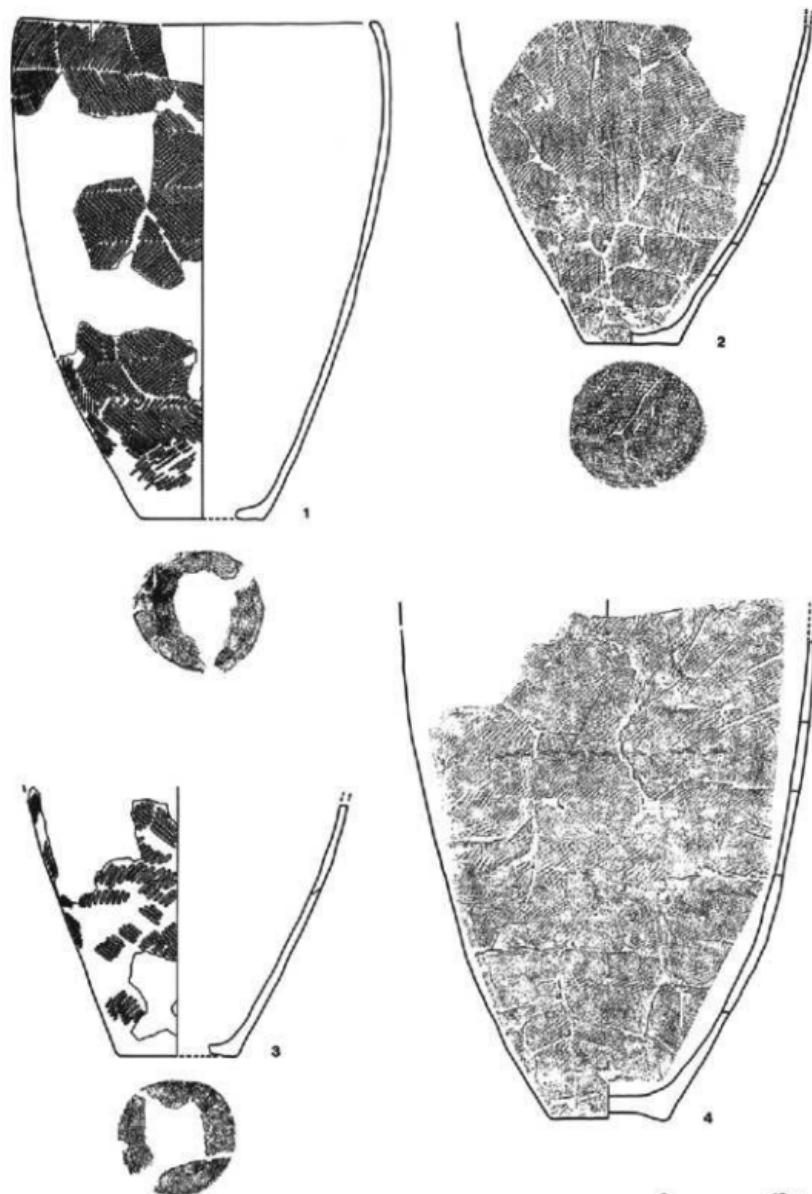
石簇は25点ある。A区出土のものが15点と多い。凸基有茎族17点、尖基族5点、凹基無茎族2点、円基族1点であり、長さ2～3.5cm程の小型のものが多い。石質は多様で頁岩・石英・黒曜石・チャートなどがある。

石錐は19点ある。断面菱形の細身棒状のもの3点、つまみ部を有し錐部が細長いものの6点、肉厚のつまみ部で錐部が非常に短いもの8点がある。

石匙は32点ある。その形態から縦型と横型とに分けられる。縦型は9点、横型は21点ある。つまみのえぐり部に紐が巻かれた痕跡を残す、褐色の付着物が認められるものがある。

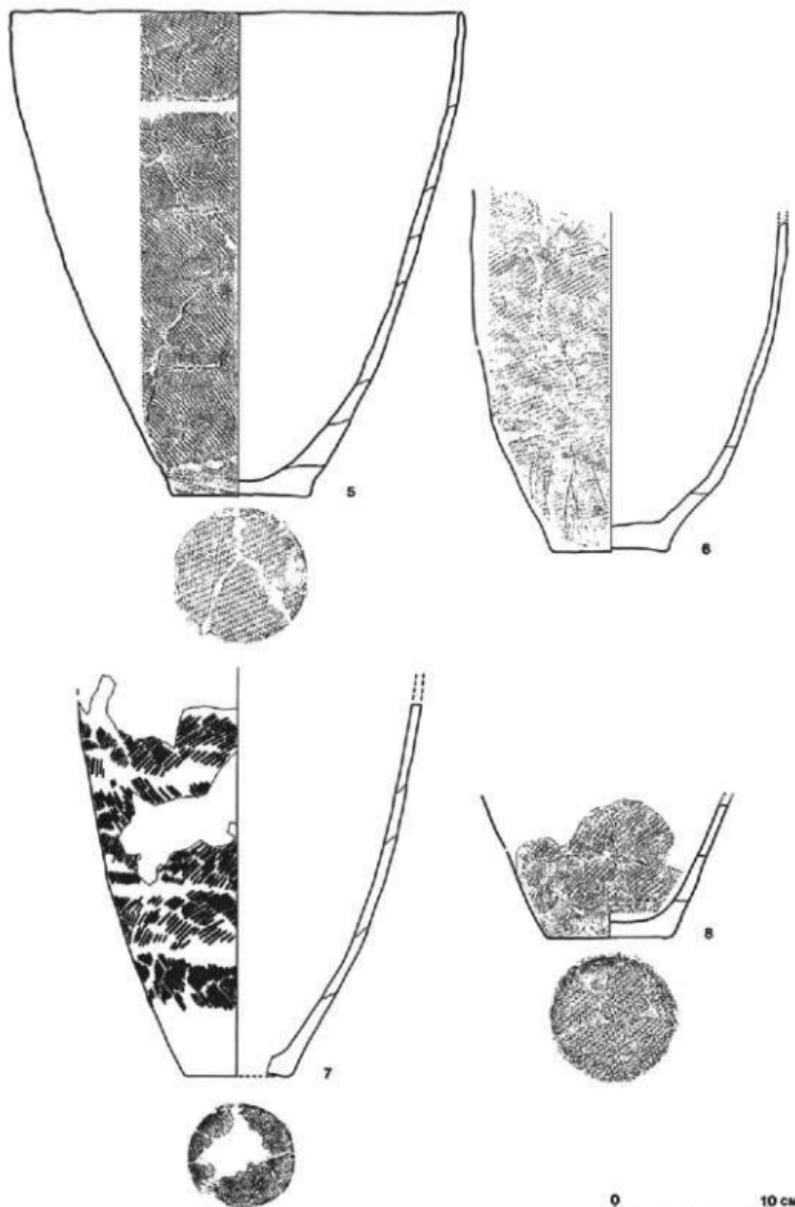
笠状石器は22点ある。頭部が尖り刃部に向けて開くもの、細身の楕円形を呈するものがある。長さ5cm内外のものと、10cm内外を呈するものがある。

磨製石斧は完形品が2点、欠損品が9点ある。定角式磨製石斧が4点、刃部が蛤刃のものが3点ある。長さ4cmを測るミニチュアの石斧が1点ある。研磨が行き届いた精巧なものである。

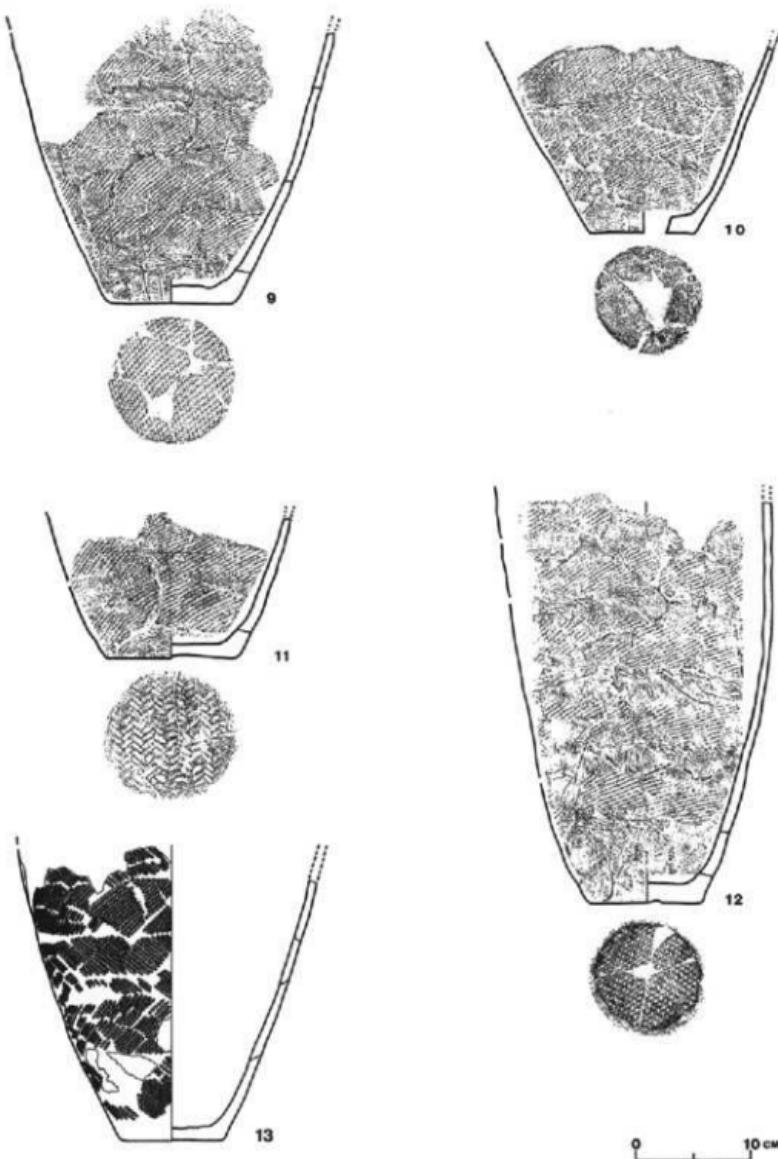


第11図 土器 (I)

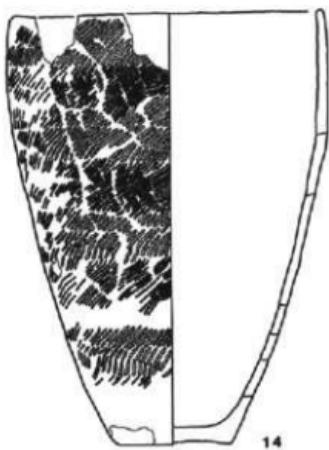
0 10 CM



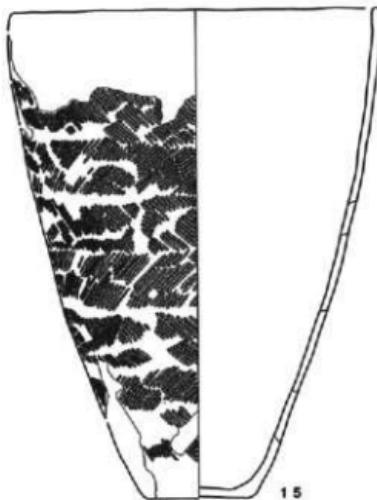
第12図 土器 (2)



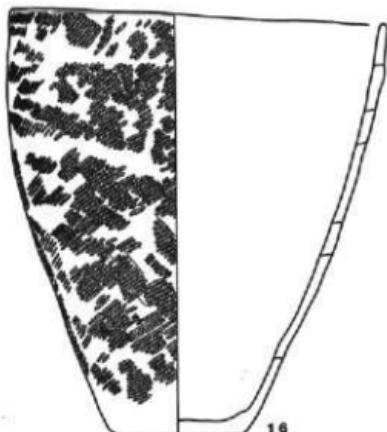
第13図 土器 (3)



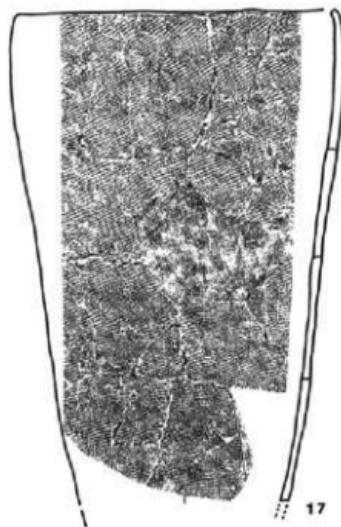
14



15



16

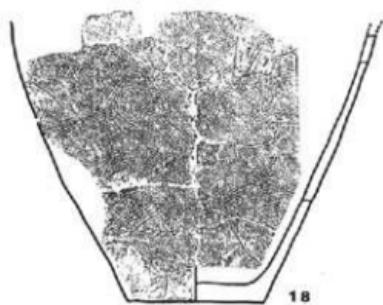


17

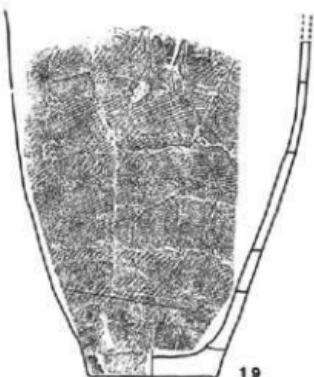


0 10 cm

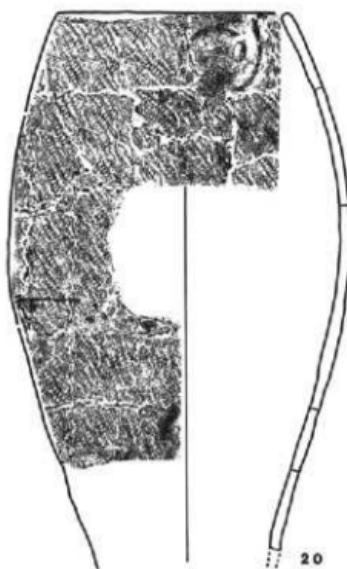
第14図 土器 (4)



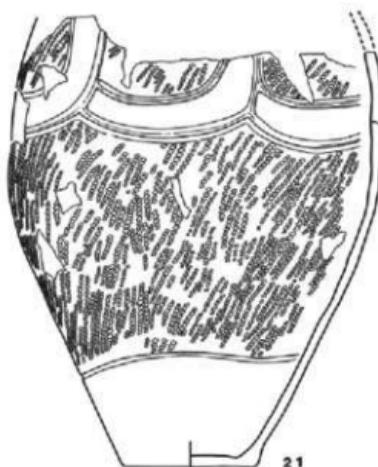
18



19



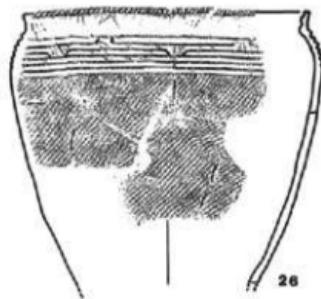
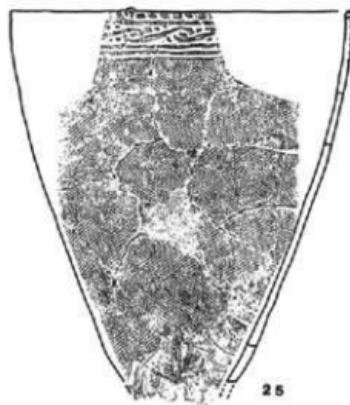
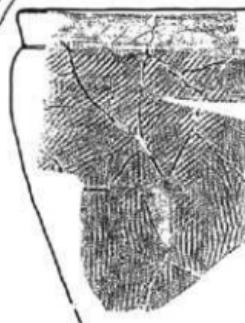
20



21

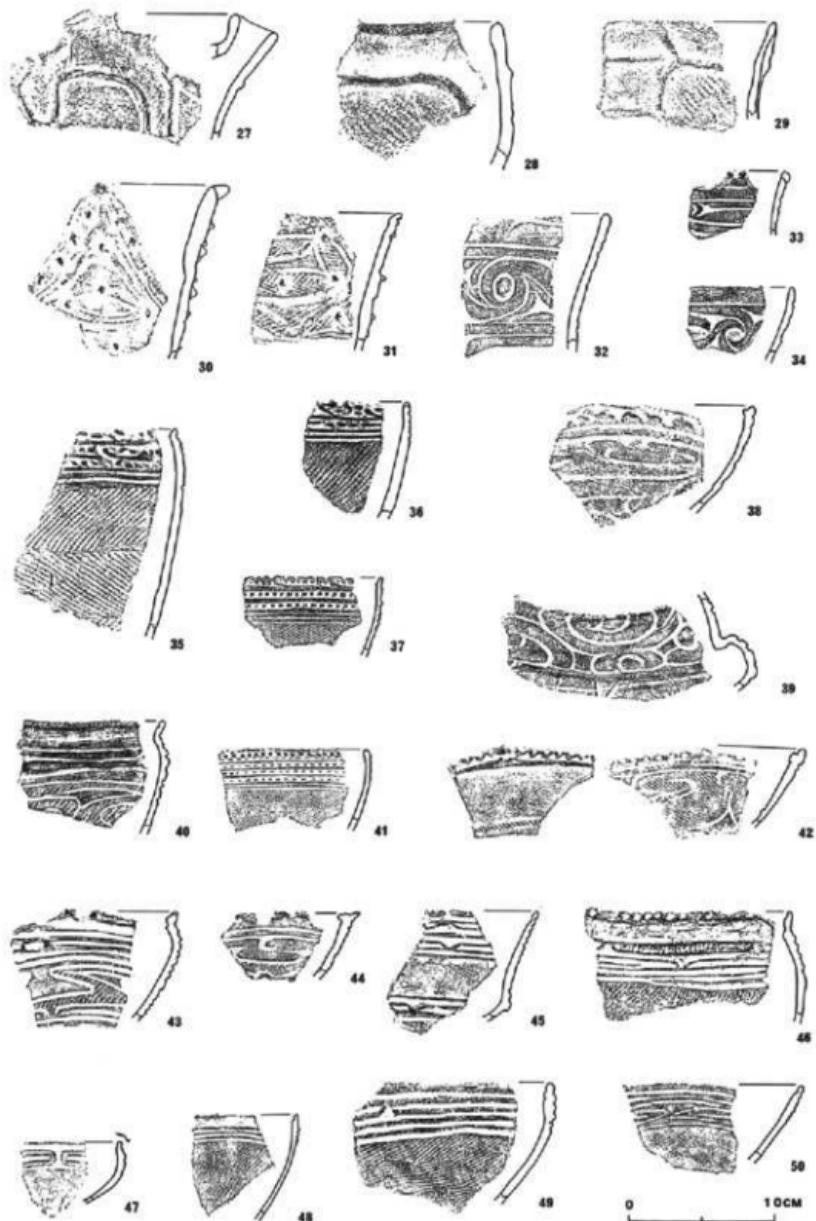
0 10 CM

第15図 土器 (5)

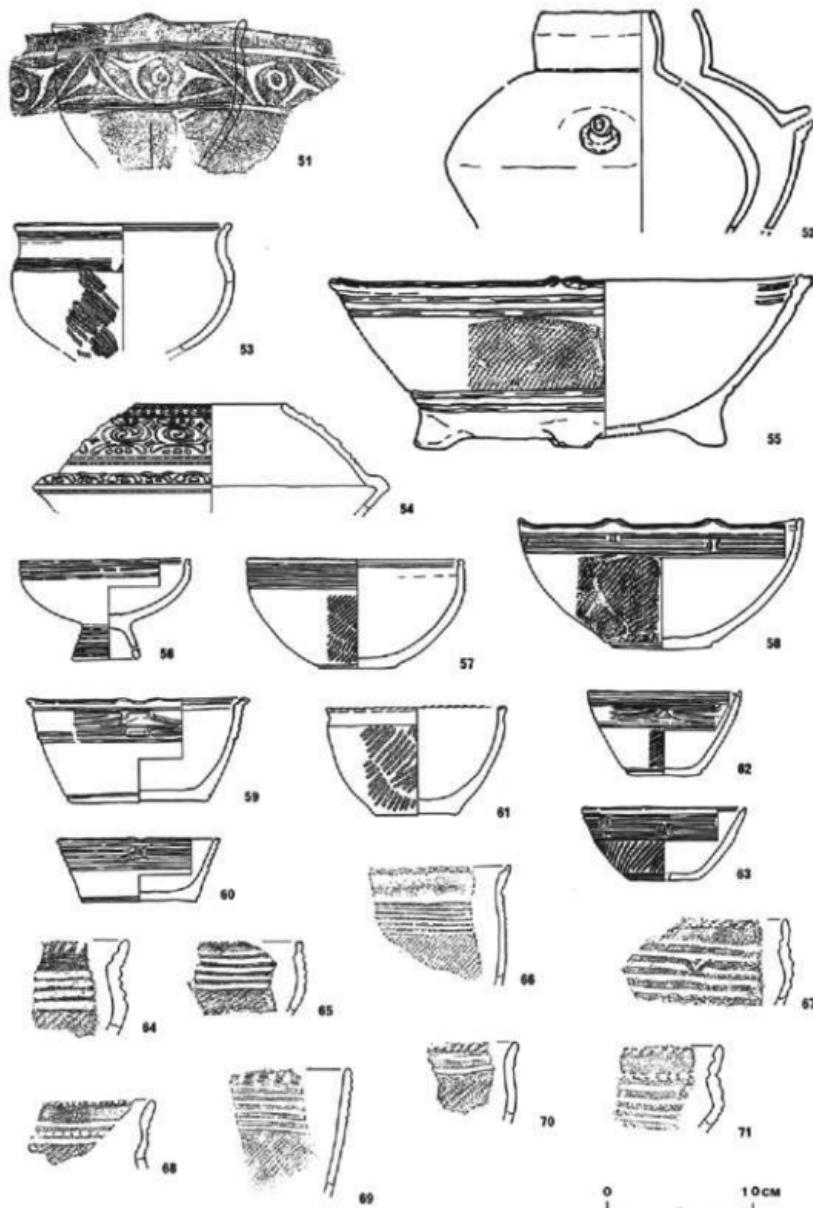


0 10 cm

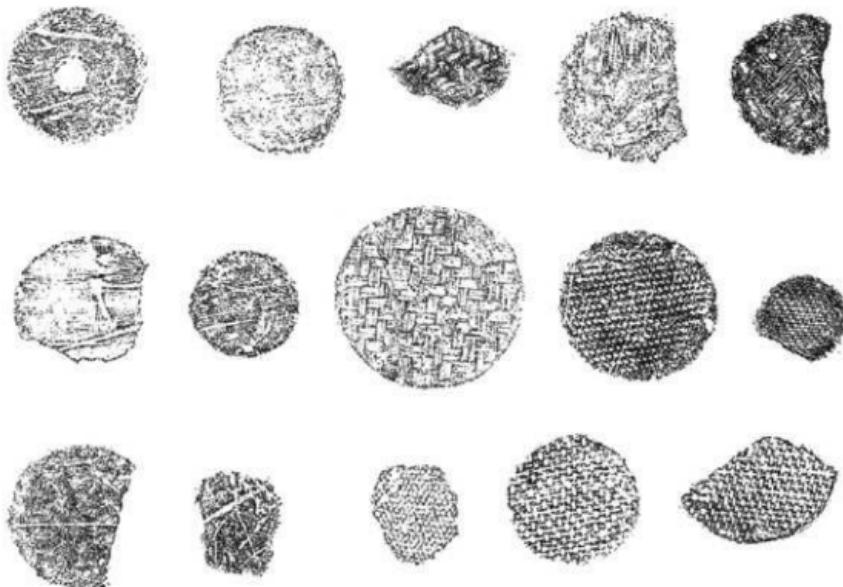
第16図 土器 (6)



第17図 土器 (7)



第18図 土器 (8)



第19図 土器底部

石棒は頭部破片が3点、他の破片が7点ある。先端を男根状に成形したものが1点、円棒に刻みを入れたものが1点ある。

石剣は先端部の破片が2点ある。先端は鋭く尖る。断面が凸レンズ状のものと、四角錐状を呈するものがある。

石刀は5点ある。いずれも切先部の破片である。刃の部分は丸みを持ち、内反りとなる幅3~4cm、厚さ1.2cmを測る。断面は凸レンズ状を呈する。

3 土偶・土製品・その他

土偶7点・土版2点・土製円盤2点・スタンプ状土製品1点・装飾品・土玉類がある。土偶は頭部が2点、胸部から腹部が2点、腹部から脚部が1点、脚部が2点ある。77は腰に1条の細沈線が巡り、腰から膝にかけて微細なクサビ状刺突が施されている。78は頭部と連結した穴が残っている。

土版はいずれも沈線による装飾が施されている。83は十字紋を基調にしており、84は破片のため全形は伺しないが、矢羽状の沈線による装飾である。

円盤状土製品は、繩紋が施された土器片の外形を円く削りとったものである。

スタンプ状土製品は完形品で、つまみ部には平行した2本の穴が穿孔されている。紋様は沈線による渦巻き紋である。



第20図 土製品

表3 遺物観察表

No	出土地点		RP	器種	計測値 m/m					色調	胎土	底盤
	地区	G			口径	頸径	胸径	底径	器高			
1	B	2	EU 29	2 深鉢	(320)		(382)	102~105	430	10 Y R 5/3	細砂混	底部穿孔
2	B	3	EU 37	10 深鉢				78~82	<273>	7.5 Y R 5/3	細砂混	
3	B	3	EU 39	12 深鉢				97~100	(233)	10 Y R 7/3	細砂混	底部穿孔
4	B	3	EU 35	8 深鉢				101~103	(410)	2.5 Y R 5/2	細砂混	
5	B	2	EU 38	11 深鉢	(386)		(390)	112~118	416	2.5 Y 6/2	う霧	網代状斑痕
6	A	11	EU 44	18 深鉢				98~104	<284>	10 Y R 6/4	細砂混	
7	B	3	EU 32	5 深鉢				91~93	<347>	5 Y R 6/4	細砂混	底部穿孔
8	B	14	EU 46	93 深鉢				102~105	<117>	7.5 Y R 5/6	粗砂混	網代状斑痕
9	B	14		97 深鉢					<230>	2.5 Y 6/3	粗砂混	網代状斑痕
10	B	2	EU 48	99 深鉢				90~95	<158>	2.5 Y R 5/4	細砂混	底部穿孔
11	A	11	EU 43	17 深鉢				112~113	<118>	10 Y R 7/6	粗砂混	網代状斑痕
12	B	3·8	EU 34	7 深鉢			(223)	83~94	<345>	10 Y R 5/2	細砂混	網代状斑痕
13	B	2·3	EU 30	3 深鉢				87~90	<250>	10 Y R 6/3	細砂混	
14	B	2	EU 41	14 深鉢	(266)		(280)	98	374	10 Y R 6/4	粗砂混	
15	B	3	EU 36	9 深鉢	(320)		(322)	95~97	427	7.5 Y R 6/6	細砂混	
16	A	11	EU 42	15 深鉢	295~327		326	110~116	358~368	10 Y R 6/4	細砂混	網代状斑痕
17	B	3		深鉢	(274)		(288)		<422>	10 Y R 4/4	細砂混	欠損
18	B	3	EU 33	6 深鉢				118~119	<230>	2.5 Y R 5/2	細砂混	
19	B	2·3	EU 40	13 深鉢				105~106	(294)	2.5 Y R 5/2	細砂混	
20	C	10·11	SK 7	深鉢	195~197		(296)		<462>	10 Y R 6/4	粗砂混	
21	C	11		102 深鉢			(102)	115~117	<386>	7.5 Y R 7/4	粗砂混	
22	A	8	EU 45	20 深鉢	(292)	(286)	(348)	85	423~425	10 Y R 6/4	粗砂混	木製、漆味
23	A	3		34 深鉢	230~234	(232)	260		<178>	10 Y R 5/2	細砂混	底部欠損
24	A	3		37 深鉢	(392)	(388)	(410)		<252>	2.5 Y R 7/2	細砂混	底部欠損
25	A	5		26 深鉢	(293)		(293)		<288>	10 Y R 5/2	細砂混	底部欠損
26	A	3		34 深鉢	(244)	(242)	(269)		<237>	10 Y R 6/3	細砂混	底部欠損

No	出土地点		RP	器種
	地区	G		
27	C	11	SK 13	注口土器
28	C	11		102 深鉢
29	C	14	EU 50	103 深鉢
30	A	6		深鉢
31	C	10	SK 11	深鉢
32	C	8		深鉢
33	A	2		深鉢
34	A	2	23	深鉢
35	B	8		深鉢
36	A	5		深鉢
37	A	1		鉢
38	A	2	70	鉢
39	A	1		注口土器
40	B	10		深鉢
41	A	5		深鉢
42	B	15		鉢
43	A	7	41	鉢
44	A	2		鉢
45	A	6		鉢
46	A	3		深鉢
47	A	3		鉢
48	A	2		鉢
49	C	8		鉢

No	出土地点		RP	器種
	地区	G		
50	A	3		鉢
51	A	1		鉢
52	A	2	22	注口土器
53	A	3	58	鉢
54	A	1		注口土器
55	A	3		脚付鉢
56	A	7		高环
57	A	7		鉢
58	A	3	65	鉢
59	C	10	SK 7	鉢
60	A	3	71	鉢
61	A	3		鉢
62	A	3		鉢
63	A	3	35	鉢
64	A	7	47	深鉢
65	A	6		深鉢
66	A	6		深鉢
67	A	2		深鉢
68	A	3		深鉢
69	B	8	2	深鉢
70	A	3	33	深鉢
71	A	2		深鉢
72	A	4	75	蓋

No	出土地点		RP	器種
	地区	G		
73	A	3		蓋
74	C	8		蓋
75	A	1		土偶
76	A	1		土偶
77	A	3		土偶
78	B	6	1	土偶
79	不明			土偶
80	A	5		土偶
81	A	2		土偶
82	A	2		円盤
83	A	7	50	土版
84	A	3		土版
85	A	4		スタンプ状
86	A	1		装身具
87	A	3		
88	C	9		土製円盤
89	C	4		土製円盤
90	不明			装飾品
91	B	7		
92	A	8		環状土製品
93	A	11	60	土玉
94	A	3		土玉
95	A	3		土玉

第V章 調査のまとめ

げんだい遺跡は最上町法田中地区の水田中にある。最上白川右岸の河岸段丘上に位置し、標高は216~219mを測る。今回の調査は昭和62年度県営は場整備事業最上町西部地区に係る緊急発掘調査である。この地区は戦後個人による基盤整備がおこなわれ、そのさいに縄紋土器や石器が多数出土したという。試掘調査により破壊を免れた地域に精査区をもうけた。各精査区の面積は、A区300m²、B区260m²、C区375m²の合計で935m²となった。

各精査区ごとの検出遺構は下記のようになる。A区では埋設遺構4基、土壤1基、性格不明遺構1基が検出されている。B区では住居跡1棟、地床炉1基、埋設遺構16基、土壤5基が検出されている。C区では住居跡1棟、地床炉2基、埋設遺構2基、土壤14基、溝跡2条、ピットが検出されている。特にB区で埋設遺構13基が群集して検出されたことが特筆される。

遺跡の時期は出土遺物から見るに、A区とB区は縄文時代後期末~晩期~弥生時代前期、C区は縄文時代中期末~後期末~晩期~弥生時代前期の所産と考えられる。縄文中期末(大木10式期)の土器はC区に限って出土している。

A~C区に渡る遺構遺物の分布範囲や、基盤整備による搅乱の影響もあると思われるが、各精査区からの土器出土量が多いことなど、縄文晩期における遺跡の規模が非常に大きかったことを窺わせる。

これまで最上白川流域では、遺跡の発見例が希であったが、今後周辺地域での発見が期待される。

参考文献

- 村山市『村山市史』別巻1 原始・古代編1982年
須藤 隆『土器組成論』『考古学研究』第19巻第4号 1973年
須藤 隆『東日本における縄文晩期から弥生時代に関する諸問題』『日本考古学協会昭和61年度大会研究発表要旨』 1986年
佐藤庄一『山形県にみる鬼ヶ岡文化の特質と変容』『考古風土記』第5号 1980年
佐藤嘉広『最上川流域における弥生文化の成立』『北奥古代文化』第16号 1985年
佐原 真『縄文／弥生』『日本考古学協会昭和61年度大会研究発表要旨』1986年
山形県教育委員会『作野遺跡発掘調査報告書』 1984年
山形県教育委員会『的場遺跡発掘調査報告書』 1978年
山形県教育委員会『町下遺跡発掘調査報告書』 1982年
山形県朝日村教育委員会『砂川A遺跡発掘調査報告書』 1984年

図 版



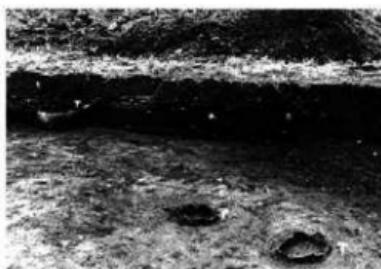
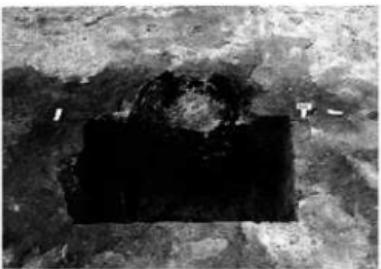
図版 I 遺跡近景（南西から）
C区近景（南から）



図版2 A区近景（東から）
S X25遺構（南から）

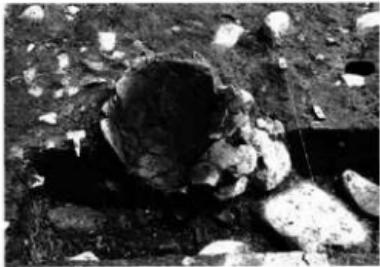
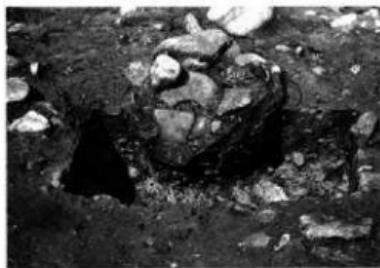
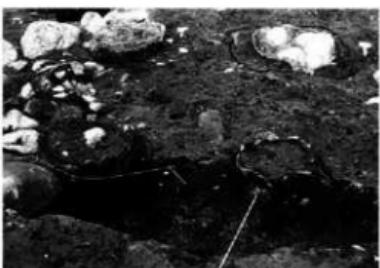
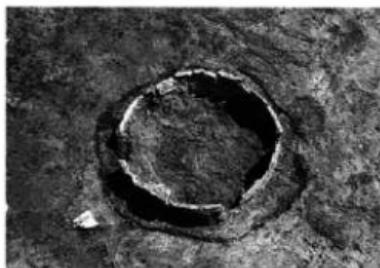


図版 3 B区近景（南から）
B区埋設土器



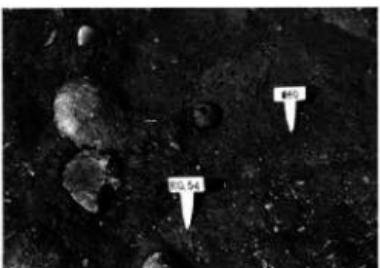
図版4 調査区近景（西から）
A区 S X25道橋（南東から）
同上（東から）
A区 E U44-43-42（北から）

A区 E U45（南から）
A区 E U44（南から）
A区 E U43（南から）
A区 E U42（北から）



図版 5
A区 E U45 (南から)
B区 S K I (北から)
B区 E U29 (南から)
B区 E U30 (南から)

B区 E U32・34 (南から)
B区 E U33 (東から)
B区 E U37・36 (東から)
B区 E U38 (南から)



図版 6 B区 EU40 (南から)
B区 EU41 (南から)
B区 EU46 (南から)
B区 RP98 (南から)

B区 RP60 (No.93) 出土状況
C区 近景 (東から)
C区 SK20 (南から)
C区 RP102 (No.21) (南から)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

図版 7 土器



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



24



25

図版 8 土器



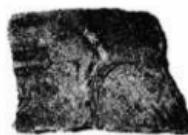
26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43

図版9 土器



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61

図版10 土器



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



78

図版II 土器・土製品



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



23

図版12 土製品



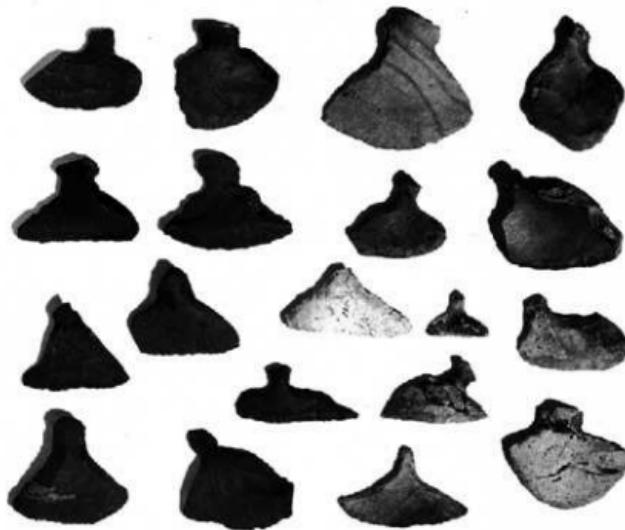
石鏃·石錐



amat 石器



石匙



石匙

圖版14 石器



磨製石斧



石劍 · 石棒

山形県埋蔵文化財調査報告書第128集

げんだい遺跡

発掘調査報告書

昭和63年 3月23日 印刷
昭和63年 3月25日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 山形印刷株式会社
